

名前	年 組
----	-----

戦後80年朽ちる遺跡

記事A

現地保存かなわず移設

秋田市土崎地区の「土崎みなと歴史伝承館」。2018年の開館以来、延べ15万人が訪れている市北部の歴史を伝える施設だ。

国指定重要無形民俗文化財の土崎神明社祭の曳山行事や、江戸期から明治期にかけて日本海側の交易を担った「北前船」に関する展示を抜け、奥の部屋に入るとそれまでの明るい雰囲気が一変する。

並ぶのは、80年前にこの地に米軍が行った「土崎空襲」の惨禍の一端を伝える展示物。薄暗い照明の室内の中心に、表面がめめ状に溶けたコンクリート製の柱がある。

「部分、部分は再現されている。それでもかなり違うというのが印象だ」。展示を見つめる秋田大大学院の外池智教授（社会科教育学）がつぶやく。

柱はかつて、伝承館から1キロほど離れた「日本石油秋田製油所（現ENEOS秋田油槽所）」



の敷地内の建物にあった。製油所は空襲の標的となった場所だ。「現地保存がかなわなかったのは、残念としか言いようがない」。外池教授の言葉には無念さがにじむ。

1945年8月14日から15日に行われた空襲では、製油所破壊のため、1万2047発の爆弾が投下された。体験者によれば、製油所の従業員やその家族、救援に入った日本兵や地元住民らも犠牲になった。正確な犠牲者数は今も分かっていない。

建物は空襲当時、「圧縮機室」として使われていたという。空襲による火災で柱などが焼けたされたが、戦後は外壁を作り直し「試験室」として活用された。

2階建てで、延べ床面積は約600平方メートル。いつからか空襲の爪痕を残す「被爆倉庫」と呼ばれるようになり、平和学習にも生かされてきた。

外池教授が倉庫に初めて足を踏み入れたのは2006年ごろだ。授業の題材として、学生から提案されたのだという。倉庫の中は薄暗かったが、わずかに漏れ入る太陽光が焼けただれた柱を照らしていた。

その後も学生を連れ、何度も倉庫に足を踏み入れた。「学生も圧倒されていた。『場の持つ力』はすごい。（★）

とはまさにこのことだ」と、戦争を知らない世代に倉庫が空襲の事実を伝えてくれることを確信したという。「体験者が減る中でモノに語らせることを考え

「被爆倉庫」の柱が移設された展示室で戦争遺跡の価値を語る外池教授＝秋田市の土崎みなと歴史伝承館



なければいけないと言われてきたが、戦争遺跡の価値を実感した」と語る。

地元で伝承活動を続ける市民団体「土崎港被爆市民会議」の伊藤紀久夫会長（84）は、外池教授の授業に協力してきた。あるとき教授に「文化財としての価値がある。残さなければいけない」と言葉をかけてもらったこ

とを覚えている。

「われわれも空襲の標的となった場所に立っているという被爆倉庫の持つ伝える力は大いと思っていたけれど、文化財として保護する方法もあるんだなと思った」。伊藤会長は振り返る。

関係者が現地保存の価値を重く見ていた「被爆倉庫」。日本石油の後継の会社は、外池教授の授業のほか、希望する市民の見学を受け入れてきた。その状況が一変したのは、12年4月。

「爆弾低気圧」により、被爆倉庫の一部が損傷、倒壊の危険が生じた。

最終的に数本の柱などを展示する歴史伝承館が開館したのは、それから6年後のことだ。この間、秋田市が倉庫を所有す

る会社と協議するなどし、「倉庫の無償譲渡」「部分的な移築」を決めていた。

「一部移設の成り行きは、ほとんど分からないままだった」と、伊藤会長は思い返す。全てを移設するには倉庫の強度に関する課題もあると聞かされ、最後は「仕方がない」と了承した。ここに空襲があったことを示す「証人」の現地保存が、なぜかなわなかったのか。

取材班が調べを進めると、議論の過程を記録した文書にたどり着いた。

〈秋田魁新報2025年5月17日付より。記事は手直しています〉

1

記事Aの本文中に用いられている語句について、次の(1)(2)の問いに答えましょう。

(1) 次の①～⑤の語句にふさわしい意味をア～オの中から選び、記号で答えましょう。

- ① 延べ ② 交易 ③ 惨禍 ④ 爪痕 ⑤ 協議

- ア 災害などが残した被害や影響
イ 同一のものも重複して数えた総計
ウ 災害などによる痛ましい災難
エ 多人数で寄り集まってする相談
オ 品物を交換、売買すること

①	
②	
③	
④	
⑤	

記事A

戦後80年 朽ちる遺跡

現地保存かなわず移設

秋田市土崎地区の「土崎みなと歴史伝承館」。2018年の開館以来、延べ15万人が訪れている市北部の歴史を伝える施設だ。

国指定重要無形民俗文化財の土崎神明社祭の曳山^{ひきやま}行事や、江戸期から明治期にかけて日本海側の交易を担った「北前船」に関する展示を抜け、奥の部屋に入るとそれまでの明るい雰囲気が一変する。

並ぶのは、80年前にこの地に米軍が行った「土崎空襲」の惨禍の一端を伝える展示物。薄暗い照明の室内の中心に、表面があめ状に溶けたコンクリート製の柱がある。

「部分、部分は再現されている。それでもかなり違うというのが印象だ」。展示を見つめる秋田大大学院の外池智教授(社会科教育学)がつぶやく。

柱はかつて、伝承館から1^キほど離れた「日本石油秋田製油所(現ENEOS秋田油槽所)」の敷地内の建物にあった。製油所は空襲の標的となった場所だ。「現地保存がかなわなかったのは、残念としか言いようがない」。外池教授の言葉には無念さがにじむ。

1945年8月14日から15日に行われた空襲では、製油所破壊のため、1万2047発の爆弾が投下された。体験者によれば、製油所の従業員やその家族、救援に入

った日本兵や地元住民らも犠牲になった。正確な犠牲者数は今も分かっていない。

建物は空襲当時、「圧縮機室」として使われていたという。空襲による火災で柱などが焼けたのだが、戦後は外壁を作り直し「試験室」として活用された。2階建てで、延べ床面積は約600平方^メ。いつからか空襲の爪痕を残す

「被爆倉庫」と呼ばれるようになり、平和学習にも生かされてきた。

外池教授が倉庫に初めて足を踏み入れたのは2006年ごろだ。授業の題材として、学生から提案されたのだという。倉庫の中は薄暗かったが、わずかに漏れ入る太陽光が焼けただれた柱を照らしていた。

その後も学生を連れ、何度も倉庫に足を踏み入れた。「学生も圧倒されていた。『場の持つ力』はすごい。(★)

とはまさにこのことだ」と、戦争を知らない世代に倉庫が空襲の事実を伝えてくれることを確信したという。「体験者が減る中でモノに語らせることを考えなければいけないとは言われてきたが、戦争遺跡の価値を実感した」と語る。

地元で伝承活動が続ける市民団体「土崎港被爆市民会議」の伊藤紀久夫会長(84)は、外池教授の授業に協力してきた。あるとき教授

に「文化財としての価値がある。残さなければいけない」と言葉をかけてもらったことを覚えてい

る。「われわれも空襲の標的となった場所に立っているという被爆倉庫の持つ伝える力は大きいと思っ

ていた「被爆倉庫」。日本石油の後継の会社は、外池教授の授業のほか、希望する市民の見学を受け入れてきた。その状況が一変したのは、12年4月。「爆弾低気圧」により、被爆倉庫の一部が損傷、倒壊の危険が生じた。

最終的に数本の柱などを展示する歴史伝承館が開館したのは、それから6年後のことだ。この間、秋田市が倉庫を所有する会社と協議するなどし、「倉庫の無償譲渡」「部分的な移築」を決めていた。

「一部移設の成り行きは、ほとんど分からないままだった」と、伊藤会長は思い返す。全てを移設するには倉庫の強度に関する課題もあると聞かされ、最後は「仕方がない」と了承した。

ここに空襲があったことを示す「証人」の現地保存が、なぜかなわなかったのか。取材班が調べを進めると、議論の過程を記録した文書にたどり着いた。

△秋田魁新報2025年5月17日付より。記事は手直ししています▽

(2) 次のA～Cを意味する語句を漢字二字の熟語で書き表すとともに、同音異義の語句を(1)の①～⑤の中から一つ選んで記号で答えましょう。

- A 人々の日常に密接に関連し、社会全体の役に立つこと
B 団体、活動などに仲間として加わること
C 一つの言葉について範囲を限定して捉えた場合の意味

A			
同音	異義		
B			
同音	異義		
C			
同音	異義		

記事Aの本文中における表現について、次の(1)(2)の問いに答えましょう。

(1) 「モノに語らせる」とありますが、「モノ」と片仮名表記にした意図と効果について、次のア～エの中からふさわしい考えを選んで記号で答えましょう。

ア 漢字表記の重々しさを解消し、過度に戦争の悲惨さを強調しないようにした。

イ 漢字表記による意味の限定性を回避し、被爆倉庫以外の被害も示唆した。

ウ 片仮名表記の曖昧さを生かし、文化財としての価値への疑義を喚起した。

エ 片仮名表記の多義性を強調し、被爆倉庫の物体を越えた存在感を実感させた。

(2) (★)の部分に、「他人から何度も聞くよりも、自分自身が一度見たほうがよく分かる」という意味の故事成語を書きましよう。

記事B

戦後80年朽ちる遺跡

文化財保護の検討せず

土崎空襲の爪痕を残す「被爆倉庫」が、なぜ現地に保存できなかったのか。取材班は秋田市が保管する倉庫所有会社との契約書や一部移設の経緯を記した文書の写しを入手し、議論や手続きの一部始終を確認した。

象徴的なやりとりがある。倉庫が「爆弾低気圧」で損傷して3年以上が経過した2015年11月16日、体験者らでつくる「土崎港被爆市民会議」のメンバーらと市の担当者が向き合った。

市民会議側は訴えた。「被爆倉庫は、日本最後の空襲の遺跡としての貴重なもの。現地保存が最も価値がある。一部を移築しても分かりにくい。教育委員会に文化財保護でお願いできないか」

市民会議は、子どもたちへの語り部活動などで倉庫を活用してきた。12年に所有する会社が解体の意向を示したことを受け、当初から市などに現地保存を申し入れており、この日は、市が建物の寄付を

受けたことも知らなかったと発言した。

市当局はこう応じた。

「過去2年間の協議もしてきたし（倉庫を所有していた）会社の意向もあるので部分移築でご理解いただきたい。活用方法や残し方についての意見は伺うが（中略）2年のワークショップで話し合った内容をここでひっくり返すというのは難しい」

体験者らと市のすれ違いがうかがえる。市民会議はこの直後、穂積志市長（当時）にも質問状を出したが、同じ回答だった。

焦点となった文化財としての保護。その重要性をかねて訴えていたのが外池智・秋田

大学院教授（社会科教育学）だ。「終戦前夜に爆撃を受けたという経緯を見ても、現地に保存することが重要だ」と、市民会議とは別に県や市に要望してきたという。

取材班が確認した文書で「文化財」というワードが出たのは市民会議の発言のみ。実際に保護の道は探られたのだろうか。市文化振興課によると、被爆倉庫の移設前後に市が文化財化に向けた検討を行った記録はないという。「文化財とするにはさまざまな視点での議論が必要だ。被爆倉庫については、まずは実現可能な保存策を考えたものと認識している」

今、数本の柱などが18年に開館した「土崎みなと歴史伝承館」に展示されている。

今、数本の柱などが18年に開館した「土崎みなと歴史伝承館」に展示されている。



「被爆倉庫」があった場所は現在、更地になっている＝秋田市のENEOS秋田油槽所

「被爆倉庫」一部移設の経緯

2012年4月	▶「爆弾低気圧」により損傷
6月	▶所有会社が土崎港被爆市民会議に解体の意向を伝達。市民会議が秋田市などに保存について相談
8月	▶地元の団体が市に、倉庫の移築保存や伝統芸能を伝える資料館の確保を要望
13年6月	▶市が所有会社と協議を開始
14年3月	▶60平方メートルを「可能な範囲での移築を検討する」と土崎まちづくり基本構想に明記
11月	▶市と所有会社が無償譲渡契約を締結
15年1月	▶市が柱などを資料館に移設する方針を地元の説明
11月	▶市が市民会議などに資料館の基本設計を説明。市民会議が市長宛てに倉庫の現状保存の可否を質問
12月	▶市が市民会議に「現地での保存は困難」「一部移築を前提」と回答
17年1月	▶解体工事が始まる
18年3月	▶「土崎みなと歴史伝承館」開館

※秋田市保管の文書や当時の本紙記事を基に作成

域に案内し、理解を深めてもらっているという。

戦争遺跡の保存に詳しい慶応大の安藤広道教授（考古学）は被爆倉庫の一部を伝承館に移設したことについて、「決して悪い取り組みではない」とした上で、「戦争遺跡にさまざまな歴史を結び付けて語る大事さを地域で共有しなければ保存の議論に向いていかない」と指摘する。

全国で現地保存されている戦争遺跡には、地元の声を重く見て行政が方針を転換した例もある。被爆倉庫移設の議論に関わった人たちからは、「全市民的な議論にならないか」という後悔も聞かれる。

取材班が県内25市町村に聞いたところ、保存の後ろ盾となる文化財の指定や登録に至ったケースは現時点ではない。戦争遺跡の存在自体を把握していないとした自治体もある。

被爆倉庫が一部移設にとどまった経緯を改めて見つめると、保護されない戦争遺跡は、将来に残せるのだろうかという疑問が浮かぶ。

△秋田魁新報2025年5月18日付より▽

襲を含め、地域の歴史を伝える施設だ。展示のすぐ隣には、証言講話会などが開催できるスペースも設置され、使い勝手はいい。ただ、語り部らは「日本石油が狙われたということを伝えるには、やはりあの場所にはかなわない」との思いが残る。

爆撃を受けてから長い時間がたち、倒壊の危険が生じたことに端を発した移設の議論。市民会議の伊藤紀久夫会長（84）は「倉庫が壊れる前に保存に向けた議論ができていれば、他の道もあったのでは

3

外池教授が被爆倉庫に初めて足を踏み入れたときの様子を、記事では「倉庫の中は薄暗かったが、わずかに漏れ入る太陽光が焼けただれた柱を照らしていた」と描写しています。この描写が読み手に与える印象についてふさわしい説明を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えましょう。

- ア 柱の存在が困難に耐え戦争に勝利する気持ちの大切さを訴えている。
- イ 柱が太陽光によってより一層焼かれて老朽化したことを強調している。
- ウ 柱の状態が爆撃の激しさや戦争の恐ろしさと醜さを暗示している。
- エ 薄暗い中で光が当たる柱だけを一部移設する重要性を感じさせている。

4

記事Aで外池教授が「それでもかなり違うという印象」をもった主な理由を、記事Bとあわせ読みながら、次のようにまとめました。空欄Aには二つの記事から割り出した分数を、空欄イとウには、二つの記事に共通する記述を引用して答えを完成させましょう。

実際に空襲を受けた現場から1^{キロ}も離れた「土崎みなと歴史伝承館」に、延べ床面積のわずか（ア）だけ、（イ）などを移設して展示しただけで全体像が見えない上、実際に空襲の標的とされた、日本最大級の石油施設があった場所に立つことで感じることができる（ウ）を実感することができないから。

ア	イ	ウ

5

記事AとBを関連付けて読み、次の(1)(2)の問いに答えましょう。

(1) 被爆倉庫を所有する会社が解体の意向を示したのはなぜでしょう。秋田大学・土崎港被爆市民会議・ENEOS秋田油槽所の三者の取り組みと関係付けて理由を書きましょう。

(2) 記事Bの「『被爆倉庫』一部移設の経緯」からは、所有する会社による秋田市への倉庫の無償譲渡と、資料館の設計及び倉庫の一部移設はほぼ同時進行で計画されていることが分かります。このことから推測される、倉庫の現地保存がかなわなかった原因となる問題点を書きましょう。

戦争遺跡が文化財として保護された事例は、広島の実験ドームや東京の旧陸軍中野学校跡など、県外でもごく一部にとどまっています。その背景として、次のような問題点が指摘されています。これを踏まえて、戦争遺跡の保存に対する自分の考えを、四〇〇字以内にまとめて書きましょう。

問題点

- ・歴史的価値についての評価が定まっていない
- ・戦争そのものや偏った歴史認識を肯定する理由に利用される可能性がある
- ・現行の文化財保護法では近代以降の建築物や戦争に関する構造物の指定規準が曖昧なままにされている
- ・戦後世代の戦争に対する関心が薄れ、保存する理由が理解されない

[illegible]